色彩学　第1巻　第1号　2022年　29－30

特集「色への興味を研究に：研究計画から論文投稿まで」　査読を行う
The way to sublimate your interest in color to academic research: From designing research to submitting paper

査読者の心得

What Reviewer ought to know

大住 雅之　株式会社 オフィス・カラーサイエンス
Masayuki Osumi　Office Color Science Co., Ltd.

キーワード：査読，査読者，客観性，中立性，責任
Keywords：peer review，reviewer，objectivity，neutrality，responsibility

1．はじめに

学会の重要な目的の一つに，研究成果の公表の場を提供することがある．当学会でこれを担うのが，日本色彩学会論文誌である．学会はその知識レベルと品位を保つ為に委員会を構成し，会員から選出された委員が各種の運営を行う．論文誌では著者と編集委員会，そして査読者の三者の関係において，ある一定水準の研究成果を，論文として広く世の中に公開する事を，お互いの協力の上で行っている．本稿では，本特集の中にあってやや視点を変え，査読を行う上で査読者の心得について述べたい．

2．査読を引き受ける

論文が投稿されたら，論文誌編集委員会で協議して査読者の選定と依頼を行う．日本色彩学会論文誌の場合，参考文献に示した各種規定や手引書には，原著論文及び研究資料に対しては２名の査読者が，研究速報に対しては１名の査読者が選定される事が記されている．査読者は論文の内容を吟味し，専門性及び査読に見合う力量と信頼性を備えた学識経験者が選定される．この際，状況や必要に応じて当学会会員以外の方でも，候補とする場合がある．

依頼に際しては，最初に可能性の打診から始める．通常は査読者候補にタイトルと抄録部分を送り，一旦，査読の許諾可否の意見を伺い，引き受けて頂けるとなれば，投稿論文や査読結果の記入用紙等が送られる．論文を受け取り，査読を引き受けるとなった段階で，査読者には，①論文誌の権威と著者の権利を保護する責任と厳正中立の立場の保持，②査読依頼を受けた事実及び査読中の論文の内容を他者に漏らさない，③当該論文が公刊されるまでその内容を自己のために利用しない，といった責務が発生する．まずはその覚悟を持って許諾の判断が有り，また，査読に際する客観性や中立性を保てない，著者との利害関係が有る，期間内に査読が終了できないという事が判明した場合には，速やかに査読を断わらなければならない．しかし一方でそのような状況に無い場合、可能な限り査読はお引き受け頂きたい．冒頭に述べたように，学会は相互的な協力関係によって成立している．そして査読というプロセスは，おそらく学会の要であり，その経験は何事にも代え難い．査読者として打診を受けた段階で，少なくとも委員会では，その分野の権威として認められたと同様である．学会が必要十分な力量と経験を兼ね備えた査読者を豊富に抱えていれば，より的確な指摘とコメントが，論文の質と完成度を高め，多くの採択につながる結果を生む．即ち学会の成否は査読者にかかっているといっても過言ではない．そのような良い循環を作る為には，査読を行う事が第一歩である．尚，当学会の査読方式は，著者に査読者の名前が知らされない Single Blind Peer Review をとっている．

さて，お引き受け頂く際には，その時点で査読計画（日程）を立てることが肝要である．論文を投稿する著者には，それなりの背景や事情がある．学位の取得に関係していたり，何よりも貴重な研究成果であったり，著者の人生を左右するに至ることも往々にしてある．判定の迅速な完了が望ましく，定められた期間（初回の査読期間は原則一か月）の中で回答することは，最低限の使命である．査読にかかる負荷量を確認し，完成度の低い論文程、時間がかかることも念頭に入れ，査読日程をしっかりと確保する．

3．査読に当たって

査読に際して，まず考えて頂くことは，査読者と著者は対等ということである．今では著者が誰であるかを，査読者は知った上で査読を実施している．相手が誰であろうが，査読者という立場を誤解することなく，内容の独創性，新規性，信頼性，有用性，完成度，ならびに題目，構成・表現の適切性の観点からチェックを行い，客観性の確保と，厳正中立の立ち位置を崩すことなく，コメントの作成と判定を行う．厳しすぎ

ず，また，学会誌の品位を落とさない事を常に意識の中に置く必要があり，判断はなかなかに難しい．常に安定した査読結果が得られるように心がけ，加えて次の点に注意しながら査読を実施して頂きたい．

・個人的な持論の展開を行わない．
・図やデータに至るまでの確認を怠らない．私の経験では本文と図や表の数値が一致していない場合が多く見受けられる．図表も本文と変わらず論文に記載された事実である．
・修正意見やコメントに関しては，できるだけ断定形・命令形を避け，再検討依頼形にする．繰り返し著者と査読者は対等である．
・新たな調査や実験を追加するような要求は極力行なわない．できるだけ原稿に記述された事柄だけについての判断を行う．修正の負荷が大きい要求を行っても，受け取った著者は困惑するだけである．どうしても必要な場合は，むしろ論文としての採択は不可であると判断すべきである．
・指摘やコメントは，言い換えれば論文の完成度を向上させる為のサジェスチョンである．
・採択に至る最短の可能性の判断を行い，著者にとって最善の道筋をつけ，不利益を生じさせない．例えば１回の修正で採択される見込みが無い投稿に対し，同情的に修正による採択の可能性を残した判断を行った場合，かえって著者の手を煩わせるばかりとなる．はっきりとした判断を心がけ，再投稿を促したほうが修正の機会も増え，著者にとって有利な場合もある．
・続報の場合，必ず前報をチェックする．大抵の場合，前報と同じ査読者が選定されるが，諸事情によって，新たに異なる査読者に依頼する場合もある．
・論文投稿規定では，修正は１回までとされている．初回の査読で，採択可の判定に至らない場合，著者は指摘に対する修正を施して再審査となる．初回の査読は慎重に行い，過不足が無いように見極める．

４．再査読

初回の審査で採択に至らず，論文の修正を求める判断となった場合，著者による修正の後，修正稿と指摘箇所に対しどのような修正を加えたかのコメントが，論文誌編集委員会を経由して返ってくる．査読者は，これに従って再査読を行う．修正は１回までであるので，再査読の判定は可か不可のいずれかであるが，査読自体は基本的に初回と変わらない．尚，再査読の場合，査読期間は三週間であり，初回よりやや短い．特に再査読で気をつける点は，初回で指摘した事項以外の新たな事項を，原則指摘しないことである．後が無い再審査では，著者は対応のしようが無く，査読ルール違反であり，初回査読を慎重に行わなければならない理由がここにある．尚，修正稿ではなく，再投稿の場合，その限りではない．

５．日本色彩学会論文誌編集委員会の責務

本稿では，査読者に対する解説を主眼に進めてきたが，ここで論文誌編集委員会についても言及しておきたい．査読者同様に，論文誌編集委員も大変重要な役割を担うからである．まず委員の心がけとして，最終判定結果については、あくまでも論文誌編集委員会が責任を持つということである．著者に対する責任は査読者に有るわけではない．委員と委員会は，投稿から採択・掲載に至るまでの全てのマネジメントを司る．査読者の選定や依頼も委員会の仕事であるし，それがゆえに査読がきちんと客観的，中立的で，指摘が適切，厳しすぎずかつ一定の水準が確保されるように行われているか，しっかりと確認する役割がある．そして委員会，査読者，著者の三者は対等であるという原則を忘れてはならない．査読者も人間であり，それが故に100％の完璧性は無い．絶対に著者に対する不利益を生んではならないといった覚悟が大切である．決められた期間内に完了していない場合でも，依頼した査読者に対して遠慮や忖度をせず，しっかりとした管理を行う事が重要である．そして査読結果を著者に伝える際には，判定の理由を分かりやすく，また将来につながるように工夫して伝えることが何よりも肝要であろう．そして時には，２名の査読者の意見が分かれた場合，第三査読への判断であったり，あるいは異議申し立てへの対応であったり，高度な判断を求められる．その際にも，三者は対等であり，不利益を生じさせないという原則を忘れてはならない．

参考文献

１）論文査読規程　一般社団法人日本色彩学会（2015制定）
２）日本色彩学会誌 論文査読の手引き　一般社団法人日本色彩学会 学会誌編集委員会（2013制定2016改訂）
３）論文投稿規程　一般社団法人日本色彩学会（2015制定）
４）日本色彩学会誌 論文投稿の手引き　一般社団法人日本色彩学会 学会誌編集委員会（2013制定2016改訂）